



# オクトーバーレイン



神在月雨

にしのまさみ

オクトーバーレイン  
～神在月雨～

にしのみさみ

1：雨の日の訪問者

十月もあと一週間で終わりとゆうときに、私の手元に死亡通知が届いた。

雨の日にわざわざ配達がなされる通信物というのは、あまり喜ばしい物ではないことが多い事を記憶していたのですが、そのご多分に漏れずに、こうして私の手元に届いた。

その内容は、かねてから容態の悪かったデハビランド氏が昨晚亡くなられたのを告げる物だった。

この通信物の内容からすると、かの氏の望まれたように静養先の自宅で医療関係者に看取られて午前一時十二分頃に息を引き取った事が、記されている。

これは、役所の決まり切った手続きなのかもしれませんが、このような通信物を十四歳の女の子のもとに送って寄こすとは気がきかないのは確かだった。

けれど、こんなふうにターミナルケアリンクの奉仕で当人に関係した全ての者に、その務めの終了を告げる意味で通知が配られる。それも手渡しで。その事で全員が務めへのある意味での感謝とねぎらいが、報告の形を取りながら示されるのだった。

確かに、この通知には、最後にねぎらいと感謝の言葉が添えられている。

ただ、デハビランド氏の場合は近い親族がいなかったので、親族が添える言葉の代わりに市長の決まり切った言葉が記されている。

そして、今このときに私は、その通知を窓際で開いてみている。普通は、奉仕に携わっていた子供の親が読んで告げるのだが、ここの住人は私とリリーしかいないので、当の私がそれに目を通してある次第なのだ。

そんな私の後ろで、心配そうに見ているリリーに、素っ気なく「デハビランドさんが亡くなったそうです」と告げた。

彼女自身は、かの氏と面識がなく、私が伝えたこと以上のことは知ってはいない。

ただ、私が時々、氏の世話をするのに出かけていたことは承知していた。

それで、この件についてはこの一言で十分と私は判断して告げたのだった。

そして、とうぜんのごとく彼女の言葉も「そうですか。残念ですね」というものでした。

その答えには感情は込められておらず、ただ答えただけのものであったことは十分承知していたが、やはり冷たく感じた、しかし、素っ気なく告げた自分にも問題があることは確かだった。

そんな自分のいやな部分に目を背けるように窓の外を見る。

外の雨はしとしとと当分止みそうもない。

三階の窓から下を見ると道路に降る雨で水の薄い膜ができているように見えた。

こんな、雨の日は彼女をもらい受けた日のことを思い出す。

あれは、軍の施設に伯父を訪ねた帰りに、中庭の駐車場に降り出した雨に濡れながら身じろぎもせずに立っている彼女を見つけた。

どうしてこんな所に傘を差さずに立っているのか、私が尋ねると「私は廃棄処分になるのでこうして迎えが来るのを待っているのです」との答えが返ってきた。

私はその言葉に驚き隣にいた伯父に尋ねた。

「どうして彼女は廃棄処分になるのですか。たとえ犯罪に荷担したとはいえ、命令で行動したのですし。それに、サイボークと云っても生きてるんですから人権はあるのではありませんか」。

その私の問いに伯父は「彼女はすでに死んでるのだよ。戸籍上ね。たとえ生きているとしても彼女の場合、脳だけでそれも、すでに脳死として扱われている。それを、蘇生してメモリー代わりに使っているだけだから人格が存在しているとは認められていないのだ。だから、彼女は物として扱われているのだ。それも、危険な機械としてね。だから廃棄処分されることになったのだよ」と答えてくれた。

私は、その言葉に釈然としない気持ちから彼女を哀れに思った。それは、物としてではなくこの時点で人としてみていたのかなと思う。

確かに、彼女とは少しの間、そうなぜ私の前に現れたのかの本来の目的を知るよしもなく、ただの伯父の気まぐれとしか思っていなかったし、同年代の子が身近にいることの珍しさに親しみを感じたからでだった。しかし、会話が進むにつれて幾分かの違和感を感じたのも事実だった。それは、後ほどの事件で明らかになるのだけれど、それにしても身近にいてくれることが嬉しかった。

実際、伯父の暗殺の計画を立てるのに、ここまでするのは費用と時間の無駄遣いだと思っている。本来は、生体実験の結果それもどちらかというとならぬ方法がとられた物をこれ幸いと別の計画へとすり替えた者達、つまりは計画立案者にとっては好都合の材料だったし、失敗しても非合法行為の暴走で片を付けれると踏んでいたのだろう。ただ、伯父の近辺に裏事情に詳しい人物と、研究機関に詳しい人物がいたために早々と事が露見してしまっただけで、関係者は処分されることとなった。けれど、生体実験の当事者はよほど鼻のきく人物らしく事の露見した時点で姿をくらませていた。

そして、彼女リリーは人権のない物として廃棄処分処分が決まった。

私は彼女の事を知って惜しいと思ひ。

「この子を私に貰えませんか」とわがままを言ってみた。

すると伯父は「ほしいのか」と素っ気なく尋ねてきた。

「ええ、このままではこの子が可愛そう」と私が言うと伯父は私の頭に手を置いて「じゃあ、持って行きなさい」と言ったのです。

私は驚いて伯父を見上げた。伯父は満面の笑みを湛えて「私も、惜しいと思っていた。折角生き返ったのにまた殺されるなんて哀れだ。かといってすでに死んだ者に哀れみを掛けるのもおかしい言う者もいる。だが、私はおまえの意見に賛成だ。後の手続きを私がやっておくから、このまま連れて帰りなさい」と私に告げた。

そんな訳で、私はその場から彼女の手を引いて連れ帰った。

後ほど、伯父の手続きでリリーに戸籍が与えられ生存権が認められるようになった。ただ、残

念な事として以前の戸籍は死亡が確定しているために取り消されなく、新たな戸籍となった。それでも、無いよりは遙かに良いと思う。

あれからかれこれ六週間ほどたってから、リリーの生前のいや、ここに来るまでの経緯について伯父から報告書の写しを貰うことができた。

それは、つい一週間前の事だった、私は内容に目を通して啞然とした。よくもまあ非人道的なことが平気でなされたことか、これと目を付けた女の子に、事故を装い入院、法外な治療費請求に、人身売買、人体実験のあげく死亡、臓器密売に生体実験サンプルとして試用。結果サイボーグのリリーが誕生。不幸中の幸いとも言えるのだろうか脳の蘇生回復し自我を取り戻す。

私としては、彼女の身の上に同情を禁じ得ないのは確かだったけれど、それを彼女自身はどう受け止めるのかは予測もできない事だった。

事実、リリー自身は私をマスターと呼び、自身を引き取った私に感謝の意を「私を救ってくださった事に感謝いたします。これからは、あなた様にお仕えすることができることを喜びと感じます」と私に告げたことは驚きと不安を感じさせた。

それは、彼女に施されたプログラム処理なのか洗脳のせいなのか判断できなかったからだった。そして、その時、私はこれは時間を掛けて説いてゆかなければならない問題と認識した。かくゆう私自身も、こんな考え方をする、少し問題のある人物でもある。

確かに、時々そう言われるので、自分で意識していることもあるので、このように自身を評価できるに他ならないけれど。

それから、二人しての生活がこのアパートで始まった。

そういえば、今から四ヶ月ほど前に、私を引き取ってくれたスコット叔父さんも、こんな雨の日の夜に亡くなった。事故だと言われている。けれど、詳しい話は尋ねても、誰も教えてくれなかった。ただ、叔父さんの友人のホルストさんが、時がたてば話せるからそれまで待つてくれないかと言ってくれたのは、感謝したのと同時に何かの事情があることも確信した。その、友人のホルストさんは、私が勤めている会社の上司でもある。

幾つからだろう、大人ばかりの中で暮らし始めたのは、七歳だっただろうか、色々あったので記憶がはっきりしていないが、だいたいその位からだったと思う。

始めは、伯父の提督に引き取られてすぐ、最初の奥さんが亡くなられ、赴任先の知人のブリストル博士夫妻に預けられた。その家から、学校に通い大学の研究室に出入りするようになり、気がついたら大学を卒業して博士の助手をしていた。このときに、夫人から料理と裁縫を教わり、博士からは学問以外に自転車や釣りを教わった。この時からだろうか、飛ぶことに憧れて、操縦を習い始め十二で単独飛行の許可を貰った。

ある意味、周りからは男勝りとかじゃじゃ馬とか思われていたに違いない。

ちょうど、そんな時に分かれていた妹に再会した。彼女も大学の研究室にいた。それもかなりトップレベルの研究者だった。双子の妹、たぶん私よりできがいいと思えた。

けれど、彼女の口から出た言葉は不思議な響きがあった。

「お姉様って、天真爛漫な感じで妹みたいに感じるのね。いろんな事ができて羨ましい」。

そんな言葉に、私は答えるすべを知らなかった。それが当たり前とっていたから。

その後、父の死について告げられたけれど、彼女の感情の無い話し方と、父の記憶がない私には、どう反応したらいいのか分からなかった。

後で、博士にその事について話したところ、悲しいとか虚しい感情になると話してくれた。そのとき、どうやら私には、いくつか感情の欠落があるのかもしれないと思えた。

それは、たぶんあのときの出来事が原因かもしれない。目の前での母の死。

そう考えたとき、ふさぎ込むような考えはやめよと思いを切り替えることにした。

そこで、私はリリーに「お茶にしましょうか」と言った。すでに十時を少し過ぎていた頃だった。

「では、紅茶の葉は何がよろしいですか」。

「そうね、ダージリンにしてください。デハビランドさんも好きでしたから」。

「分かりました。では、準備して参ります」。

そう答えると、リリーは部屋を出て行った。何時もは二人して準備をするのだけれど、今は、彼女に任せることにして、ただ外の雨を眺めることにした。

そう今はそういう気分だった。

ただ、未だに謎なのはスコット叔父さんは独身なのにどうして私を引き取ろうと思ったのかということだ。当の本人にはもう尋ねることもできない。

あれは、私が十三歳になったばかりの頃。突然この町に引っ越しすることが決まった。

それは、街が壊滅するほどの大きな事故の後、研究所も半壊してブリストル博士も何かと大変だったのと、事故に巻き込まれて私は病院に入院していた。それから伯父の転属もあり、もっと設備の整ったところでということで、この町に来て、退院して、直ぐスコット叔父さんのアパートに転がり込むことになり、現在に至る。

そういえば、叔父さんと話すことと言えば、今思えば結構風変わりな感じだった。

部屋は散らかり放題で、よく夜遅く帰ってくるものだから、朝はソファで寝ていることが多く「大人なんだからもっとしっかりしてください」とか注文を付けることが多かった。それでよく私を茶化すように「母親と会話しているみたいだ」と言われたものだった。

そういえば、ホルストさんや伯父さんからは、どちらが保護者なのか分からない会話をしていると言われた。

今、思えば懐かしい響きの言葉が脳裏をよぎってゆく、その時は、そうとは思いつまなかったけれど、思い出にすり替わった時からそれは心地よい響きになっていた。

「マスター。お茶をどうぞ」。

そう言ってリリーが、ティーカップを私に差し出す。その言葉の雰囲気からどうやら私が思いにふけているようだったので、いつ声を掛けたら良いか見定めていたらしかった。

「ありがとう。リリー」。

私が感謝を言うと彼女は、不思議そうに顔をのぞき込んで「お加減でも悪いのでしょうか」と尋ねるのであった。

どうやら私がデハビランドさんの死を悲しんで塞ぎ込んでいると考えたらしい。

「心配しなくてもいいですよ。外の雨を見て昔を思い出していただければいいですから」。

私は安心させるつもりで、そのように答えた。

それから、少し立って会社から連絡が入った。出てみるとホルストさんで、今日予定されていた試験飛行はキャンセルとなった言うことだった。それで、今日一日は、この雨のせいで外に出られないこととなった。いや、出かけようと思えばそうすることもできたのだが、午前中早々に

、あのような通信物を受け取ると、どうにも外に出ずらいものがあった。

かといって、出かけても何をするのでも無く、商店街を散策するだけの何時ものパターンはい加減卒業したかった。それに、法律上のカリキュラムも消化しておかないと、後で問題となりジュニアハイスクールに行くことになる。今の仕事上それは避けたいし、あの何とも可愛らしい制服を着て、伯父を喜ばせたくは無かったので、ここは、まじめに消化することにした。当然、私だけがするのも何ともつまらないので、リリーにも一緒にするように言う。

これは、少し彼女には後ろめたい気持ちがあったが、主人の命令として行かせたのだった。

暫くは、二人でカリキュラムの消化を行ったけれど、彼女の記憶力は素晴らしく、といってもコンピューターと脳が直結しているのだからとても適うはずもなく、彼女の的確な記憶を褒めることに終始しながらレポートのペンを進めた。

これは、以外にも記憶の助けになりまた、考えをまとめるのにもいいと私は考えているが、他の人に言わせるとキーボード入力の方が早くて読みやすいとのことだった。けれど、カリキュラムのレポートは筆記が原則で他は受け付けない。特別の理由が無い限り。

当然、それだけ本人が努力しなければならないから、それだけ、学んだ事を証明できるとの考えらしい。その点に関しては、私は少し懐疑的なのだが、そのような取り決めなので、それに従うことにしている。

それから、お昼少し過ぎた頃に昼食を取った。

今日はやる気が出ないので、時々アルバイトをしているムーンキャロットからデリバリーでアフタヌーンセットを取った。今日はラザニアとマッシュポテトサラダだった。

ムーンキャロットはホルストさんの叔父さんが経営しているカフェレストランだ、私が此方に引っ越してきたときから何かとお世話になっている。それで、時々アルバイトとして働かせて貰っている。本来は私を引き取ってくれたスコット叔父さんのために、料理のレパトリーを増やすため通っていたのだが、今では何かとお世話になっている。ただし、夜の営業時間は法律に抵触するために働いてはいない。

食事が終わったところに、訪問者が呼び鈴を鳴らした。

ドアを開けてみるとそこには、セシリアが看護師の格好をして立っていた。

「はあ〜い」。

私はとっさにドアを閉じた。

「ア〜ん。お姉様の意地悪。ちゃんとまじめに来たのに」。

そう言いながら五月蠅くドアを叩くので、私はしかなくドアを開けて彼女を中に入れた。

「いったい、何を考えてるの、何時もなら勝手に中に入り込んでくるくせに。今日に限ってまともに、それもわざわざ看護師の格好でくるなんて、どうゆう風の吹き回しなの」。

このように言う私の問いただしに彼女は、含み笑いをしながら答えた。

「だって、一度着てみたかったもん」。

「それだけ？」。

「やっぱり看護婦さんは、ドアから入ってお熱はかりますよって言うのが常識でしょう」。

そう言っただけのけりなのだった。いったい何処の常識なのだろう。またどこかで変な情報を拾ってきては感化されたのではと思えた。

「こんにちわ、リリー何時もの検査に来たわよ」。

そう言いながら奥に入っていくセシリア。相変わらずの身勝手さに、すでに慣れていたけれど、初対面だとかなり驚かされる行動が多い。それも、寂しさから来る物であることを私は、承知しているし、リリーにもそれなりに話してある。だからといって部屋を簡易診療所として彼方此方道具を出さないでほしかった。

「セシリアさん、そんなに荷物を出して全て必要なの」。

「いいえ、お姉様。気分です」。

「使わない物は仕舞ってください」。

「やっぱり、雰囲気って大切でしょう」。

私はむっとして言い放つ。

「仕舞って、端末壊すわよ」。

すると、私が機嫌の悪いことを察知してか、実体化したフォログラフを消去しはじめた。

セシリアは私の双子の妹で、すでに死亡したことになっている。現に今いる彼女は、実体化したフォログラフで端末を核として空間物質を結合させて実体を構築させていると言えばいいのかもしれない。実際にはもっと複雑なのだが、本来の彼女はここにはいない。

本人はコンピューターの中にいると言えるのかもしれない。これも、あの事故による結果にセシリア自身が選んだ事だった。手の施しようのない重傷で助かりようが無いと判断して自分でカプセルに入った。そのとき私は意識が無く止めようが無かった。

けれど、私が動きが取れていたなら止めたかどうかは分からない。

私が入院していた頃、よく見舞いに来てくれたのは実体化したフォログラフで面会の記録は別の人物となっていた。

一通り余分な物は消したのか、リリーの検査を始めた。

彼女を横にならせて端末の核かプローブをだして調べ始める。

「まずは、右腕を上げてみて」。

こうして見ていると、作り物とは思えない。入院中も始めは気がつかなかった。けれど、彼女の手を取ったときの感触が違った、本人で無いことが分かり、理由を尋ねると、起きたことを話してくれた。その時の私の顔は真っ青になっていたと、後ほど、セシリアが話してくれた。

「いいよね。問題は無いみたい。では、次は左腕を上げてみて」。

その言葉にリリーは応じていた。彼女自身は、セシリアをドクターと見ているようで、その話をよく聞いて従っている。ずいぶん幼い医者ではあるけれど、私が言うのもなんだけど優秀である。良い意味でも悪い意味でも、つまり俗に言うマッドサイエンティストの部類だろうと私は思っている。その彼女も、今は、死んだこととなっており、ここにいる実体は新たな戸籍に別の人物となっている。名前は同じなのに。どうやら戸籍データベースに侵入して弄ったようだ。

私が椅子に座って二人の様子を見ながらお茶を飲んでいると、セシリアは私に背を向けてからリリーの上半身を起き上がらせてから目や首のあたりの状態を調べ始めた。

「ご主人様は、大事にしてくれてますか」。

セシリアは少し嫌みたらしく尋ねる。

「はい。ドクター」。

「そう、それはよかったわね」。

さっきの仕打ちへの仕返しなのか私に背を向けたまま、ペットに話しかけるように言葉を続

ける。

「ご主人様は、忙しいから構って貰えない事もあるでしょう。うちに来る」。

「いいえ、大丈夫です。ドクター」。

「そう、でも非行少女だからあなたもたいへんよね」。

言うに事欠いて何を言い出すのやら、私を悪者に仕立て始めるのだった。

けれど、私はその行為に何も言わなかった。

確かに、私が意図したのでは無いにしても結果として、伯父達の企みに荷担してしまったのは事実だから後ろめたさのせいもある。

それは、機械を生体に近い形で再構築するナノマシンで機械の体と本来の生体部分の拒否反応を抑える目的で改良された物を彼女に組み込むという提案だった。

しかし、元々は人体蘇生のために作られた物らしかったが、どこかでその目的が外れてしまったものらしい。

実際、相性が悪いと生体はおろか機械までもが塩の結晶と化してしまう危険な物で、研究室の保管庫に嚴重に隔離していた。

それを、リリーの解放を条件に組み込むとゆう提案だった。つまり生き延びれば無罪放免されるということだった。どうせ処分されるならと、捨て鉢な判断をしたのでは無く、私はそれに異を唱えたが、彼女は了承し、決定された。

この時ほど、自分の何気ない一言を悔やんだことは無かった。

ただ、結果は成功をだっただろう。

それゆえ、ときどきこの件の言い出しっぺが様子を見に来る。いつの間にか研究の責任者の椅子に、ちゃっかり座っていたのだから開いた口がふさがらない。

暫くすると一通りの検査が終わったのか、プローブを全てしまってから、わたしに言った。

「お姉様、今日伺ったのは、検査だけで無く公爵様からの伝言を伝える為に来ました」。

その話し方は、何時ものセシリアの雰囲気と違っていたて、深刻そうな雰囲気を醸し出していました。

それで、ごくありふれた質問を試してみたのです。

「何か問題でもあったのですか」。

この問いにセシリアは珍しく浮かない顔して言った。

「じつは、公爵様からの伝言で明日屋敷に来て欲しいとの事でした」。

「ランカスター伯父様が、どういうこと」。

不審に思い尋ねた。けれど、それには答えることは無かった。珍しく彼女が情報を持っていないのだ。セシリアはわたしの問いには答えるようにプログラムされている。だれがそうしたのかは知らないが、おかげで情報は聞けば教えてくれる。

それなのに、答えが無いのはそれ以上情報が無いのだ。何時もは興味に引かれて様々な情報を集めているのに、この度は無いのは不思議だった。

それにランカスター公爵は、亡くなった母がお世話になっていた方だ、母方の遠縁に当たるそうだけれど、その素性は詳しく話してはくれなかった。ただ、本人の口から遠縁のものだと自己紹介されたので、便宜上と当人への敬意を込めて伯父様と読んでいるに過ぎない。それで、向こうは喜んでくれるのだから、あえて問うことで要らぬ波風を立てたくは無かった。

「分かったわ。伺いますと伝えておいてください」。

わたしは、そうセシリアに伝えてから、机の上の本とノートを片付け始める。

するとセシリアは、わたしの様子を見ていった。

「本当にいく気なの、また無理な話を聞かされるわよ」。

彼女が、この様に話すのはわたしを気遣っての事だと理解している。たとえ自身が機械の一部になったのだとしても、肉親であった事には変わり無く、セシリアもその事を認めて、わたしに言ったことがある、「わたしが機械の一部になったとしても、心は消えないデータとして残しています。そして思いも願いもです。それが良いか悪いかは今は分かりません。ですが、お姉様に従うように組まれているので、問題があれば止めてください」とそれ以来、わたしは何時も彼女のストッパーとしての役割を持つようにされたのでした。

それが、本来誰の意志だったかは未だに分からない。

だからといって、自己の欲望で走ってしまうセシリアをわたしが常に監視することが出来るわけでも無く、彼女に倫理的に行動してもらうために倫理観の情報をわざわざ入力したのは、残念ながらごく最近だった。何を情報源に使ったかは、ビブリアがヒントです。

それが、一番相応しいと思えたらでもあった。

いらい、彼女はわたしに対して以前に増して気遣いを示す様になった。

そして、わたしがテーブルを整えていると、セシリアは食器の片付けを手伝ってキッチンに下げてくれた。

「ありがとう。セシリア」。

わたしがそう感謝すると、

「どういたしまして」。

と答えながら、リリーと一緒に洗い物を始めるのでした。

それから、わたしは窓際の椅子に腰掛けて本を読み始めたころ、二人は戻ってきてテーブルの席に座りわたしの方を見て、二人でデータの遣り取りをしているのでした。

その内容はわたしには見えないので、わたしについての事を話していても止めることは出来ない。

その光景は奇異なものであるに違いない、それは三人の女の子がただ黙っておもいおもいに過ごしているのだから、たしかにもう少し賑やかであればそれらしい情景であるに違いないと思えた。

こんな感じでこの日の午後は過ぎて行くのであった。これが、雨の日にも出かけない時に目にするわたしの家の光景である。

それから、夕方になると、セシリアは「お邪魔しました」と言って帰って行くのだった。

どこへ、と考えると研究室に帰るのだ、彼女の自宅は大学の研究室なのだから。

## 2 公爵邸

翌日、わたしは一人公爵の屋敷に招かれて行った。

ランカスター公爵は帝国の貴族でこの国に別荘を持っている。けれどそれはお城といった方が良さそうな規模で、大きな門を通過して屋敷まで四百メートルはあり、自転車で向かったわたし

には、走りがいがあった。そもそも、ここに自転車で訪問しようなどと考える人物はまずいない。なので、出迎えに出てきた者達のあつけにとられた表情は見物だった。

それでも、公爵は何時も道理に「言ってくれば、迎えを出すのだが」と言いながらわたしを抱きしめるのでした。

どのみちこの様な屋敷には、場違いな自分自身身分を隠す気は毛頭無かったので、普段道理の格好で公爵邸に訪れたのだった。それには、自分の行動を相手に握られるのを出来るだけ避けたいとの考えもあって、わざと迎えを頼まなかった。

「お招き、ありがとうございます。それで、どのようなご用件でしょうか、伯父様」。

そうであっても礼儀だけは、ちゃんと果たすよう話す。

「まずは、奥でお茶でもいかがかな」。

公爵はまるで孫を歓迎する祖父の様に、わたしを中に招き入れるのだった。

私たちは大きな玄関ホールを抜けて多くの召使いが傳くなか客間に通された。

その客間は豪華の装飾が施されており、見る者を圧倒させる優雅さでしたが、その中でわたしの目を引いたのは、この部屋には場違いな感じの人物が一人私たちを迎えるようにテーブルの横に立っていました。

そして、わたしはメイドに勧められて、テーブルの席に着いた。それから、わたしに向かい合うように公爵も席に着いた。

それから、メイドはわたしにお茶を勧め、ブレンドティーを入れてもらう。

わたしは、自分の右横に立つ人物を気にしながら、一口茶を含んだ。それは芳醇な香り高くそれでいてすっきりとした味わいのあるものでした。

それから、わたしは尋ねた。

「不躰な、物言いかも知れませんが、わたしの横におられる方は、どのような方ですか」。

わたしの言葉を聞いて公爵は、

「まずは、お茶と会話を楽しもうでは無いか」

と言うのです。

「わかりました。では、最近は天気も宜しいでしょうから、今年のブドウはよく育つのではありませんか」

とわたしが、天気の話から始めると公爵は、

「相も変わらず、そういう話をするのだな。確かに、わたしは自家製ワインのためにぶどう園をやっておるが、わたしが聞きたいのはジョンがやっておるターミナルケアリンクのことだ。一昨日。デハビランド氏が亡くなられたそうだな」

と言ってきた。

「はい。昨日の朝に報告通知を受け取りましたが、それがなにか」。

わたしは、認めるように答える。

すると、公爵はこう尋ねてきた。

「では、今はターミナルケアリンクを行って無いということかな」。

「そうなりますね、ですが、次の申請をしようと思っはいますけど」。

「それは、困る」。

「何故です、個人の自由ではありませんか」。

「確かにそうだが、少し落ち着くまで待つてはもらえんだろうか」。

わたしは、その言葉に少し不信感を保ち尋ねた。

「待つとは、どういうことでしょうか」。

「その事なんだが」。

そう言いながら公爵は手で合図をして、先程から立っていた人物を自分の横に呼んだ。

「かれは、わたしの農園を管理している者だ。と言ってもわたしのだけでは無い、シヨン君の母親の持っていた土地も管理している」。

その言葉はわたしには信じられないことだった。なぜなら、亡くなった母が土地を所有していたことなど今まで聞いたことが無かった。

「どうして、今頃そんな話を」

とわたしは母の土地がどうこうというより何故今その話が出るのかが気に掛かって言った。

「そうだな、今まで預かっていたのだ、元々は花を育てていたのだが、耕作地の方が適していると言うことで国の勧めで耕作地にしたのだ。だが、そろそろ返してはどうかとの話しもでて、それならば、わたしの農園も含めおまえに相続してもらおうとの話だ」。

その言葉を聞いてわたしは、拒んだ。

「それは、身勝手ではありませんか、わたしの母の土地だけで無く伯父様の土地まで頂くわけには行きません」。

その言葉を聞いて公爵は笑みを湛えて言う。

「なら、買ってはもらえないだろうか」。

「それは、無理です。土地を買う程のお金を持っていません」。

わたしがそう答えると、公爵は立っている人物から書類をもらいそれを見ながら言った。

「そうだろうか。此処には、両親の遺産に今までの働いたお金の試算表があるが、十分購入できる資金はあるようだが」。

それを聞いて、いつ調べたのか分からないが、わたしが将来のために資金を集めていることを知っていたのだった。

「それは、将来自分の船を持つために貯めているものです」。

わたしは正直に答えた。

すると、公爵はこう言った。

「船を管理するのは一人では出来ない大変なことだ。今から、その管理能力を鍛える上でも農園を管理することで学んでみるのはどうだ」。

「随分な言い方ですね。農園と船とは違います」。

「そうだ、違う。けれど働く人は同じ人だ。違うかね」。

「いいえ」。

「なら、農園を受け継ぎなさい。きっと良い経験になるはずだ」。

わたしは、他にこれと言った反論が思い浮かばなかった。確かに、色々反論の余地はあったけれど、それが、本当に正当かどうかの確信が持てなかったこともあり。結局、公爵の提案を呑むこととなった。

それで、わたしが受け継ぐ農園は耕作地と果樹園、ブドウ畑にゲストハウス五棟を含む屋敷でわたしの両親からの相続資産の半分を支払うこととなった。実際に思っていた値よりかなり安か

った。その理由も後で分かった。

### 3 引っ越し

本来の意志とは関係なく農園を管理する、いや、相続することとなってしまったわたしは、リリーと一緒に荷造りをし思い出の多いアパートを出払って、農園の屋敷に引っ越したのだった。引っ越しにはホルストさんや仕事仲間も手伝ってくれて、人では十分だった。

農園の屋敷の一部はぶどう園の管理をしながら屋敷も管理していた老夫婦に使って頂くこととし、それでも広い屋敷を持てあますのではないかと思っていた。しかし、そんな心配は無用になってしまった。それは公爵のつてで、押しかけメイドが三人やってきたのだった。彼女らの給料は向こう保ちなので、此方の苦情は受け付けてもらえなかった。また、耕作人も必要であろうと、屈強な者達が数人来た。

このことで、公爵曰く「これで、人を使うことや経営のことを覚えるように」と言うのだった。どうやら、実践経験を積むようにとのことなのだろう。

わたしとしては、公爵の思案に振り回されるままに事を進めるしかありませんでした。

さて耕作地の仕事は公爵から派遣されて屈強な方々に任せるとし、部屋の割り当てを考えなければならなかった。直ぐ決まったのが、屈強な方々でゲストハウスの一番道路に面した建物を彼らに使って頂くことにしました。それは、その建物がゲストハウスの中で一番大きかったからです。その次に決まったのが、押しかけメイド三人の部屋でメイド長に一任することで早々に決定となりました。そうしている最中にわたしは、かねてから調べてもらっていた事柄について報告をホルストさんから受け取った。

それから、わたしは書斎に決まった、三階の部屋で本の山の中で、報告書の内容に目を通した。

その間にも、わたしの部屋とリリーの部屋、そしてゲストルームが決まっていったのであった。

その日の夕刻には、だいたいの物が運び込まれそれぞれの部屋が決まっていた。あとはかたづけただけだが、それは、数日かかるかも知れない。それは、わたしとリリーだけの物ならたいしたことは無いのだが、セシリアが自分も場所も欲しいと自分のサブシステムを螺旋階段の中心シャフトに構築し始めたからだ。

おかげで階段は一階壊して作り直し直径三メートルの中心シャフトを造ってその中にサブシステムを構築した。その最上部は、わたしの書斎まで突き抜けていたのだった。

そして、夕刻にはメイド達によって準備された食事を頂いたのであった。

その夜、わたしはメイド長を呼んだ。

「お呼びでしょうか。お嬢様」。

「その呼び方は止めて頂けませんか」。

「ですが、それではシヨン様」。

「呼び方は、後日改めて話しましょう。ひとつ聞いておきたい事があります」。

「なんでしょうか」。

「あなたは何故、向こうのメイド長を退いてわたしのところに来たのですか。主人からの命令で

すか、それともあなたの意志ですか」。

わたしは少しキツいようだけど、気になったのであえて尋ねた。

「わたしの意志です」。

彼女はそうきっぱり答えた。

「分かりました。それならもう言うことはありません。それから、リリーを呼んできてください」。

「分かりました」。

そう言ってメイド長は降りていった。確認したかったことは、公爵や伯父様達が何かの気を回して彼女たちを寄越したのでは無いか疑っていたので、彼女の答えから自発的であることを知った。それにしても、メイド長としてはかなり若い女性である。

暫くして、リリーが上がってきた。

「お呼びでしょうか」。

わたしは彼女がメイドの格好をしていたのに気がついたのですが、あえてその事には触れずに本題の事で尋ねた。

「リリー、あなたはご両親や姉妹の記憶がありますか」。

すると彼女は少し考える素振りをしてから、

「僅かですが、有るのでは無いかと思います」

と答えるのだった。

「その記憶に、あなたはどのように感じていますか」。

「分かりません。それが何か」。

その答えを聞いて、わたしは自分のしたことがお節介なのかも知れないと思えたけれど、すでにそのお節介は彼女を引き取るところまで進んでいたのだから、そのまま通させてもらうことにした。

「これは、あなたのご両親と姉妹の住所と資料が入っています。目を通しておいてください。それから、明日はあなたをフリーにしておきますから、自由に行動してください。メイド長には、わたしから伝えておきますから」。

そう言って、わたしはリリーに報告書を渡した。

「ありがとうございます」。

そう言うと、リリーは報告書を抱きかかえるように受け取ったのです。

その様子を見て、その記憶は彼女の中で愛着のある物である可能性が高い、と思えたのです。それからわたしは、こう言った。

「リリー、用件は以上です。あとメイド長を此方に来てもらうよう伝えてください」。

「分かりました」。

そう言って彼女は降りていった。

その様子を見守ってから、わたしは手に持っていた本を中心シャフトの上に置いた。その高さが丁度良いのに気がつき後で此処に書棚を設けようと考えた。

また、暫くしてメイド長が上がってきた。

「お呼びだそうですが」。

彼女は少し傳くようにして言った。

「度々、申し訳ない。事が一度で済めばこんな面倒な事はしないで済んだのですが、まず、お訪ねします。リリーについて何を知っていますか」。

この質問は、彼女がただ押しかけ出来たのでは無い事を感じていたからだった。

「はい。サイボーグと伺っております。それから、」。

「その先は、答えなくてもいいです」。

わたしは聞きたい言葉だけが聞けて十分で、その先の言葉を遮った。たとえ自分がかかりの事を知っていると、人からあえてその事を聞くのは、辛い話だからだった。

わたしは、呼び出した理由を話した。

「明日のことなんですが、リリーをフリーにしてあげてください」。

「分かりました。ですが、その様に話すのは何故ですか」。

彼女はわたしの言葉に合点がいかなかったようだ。

「リリーにメイド服を着せたのは、あなたではないのですか」。

「いいえ。彼女がメイドの仕事を教えて欲しいと申しましたので、先ずは形から」。

「それだけですか」。

わたしはあえて問う。

「正直申しまして、可愛いので着せてみたかったのです」。

その言葉を聞いて、わたしはそういうことかと思った。それから、

「分かりました。リリーに教えてください。それから、公爵夫人にはあなたから、ありがとうと伝えておいてください」。

わたしが最後に公爵夫人の事に触れて言ったのを、彼女は少し微笑んで承けて言った。

「ご存知だったんですね」。

「何となく、確信は持てなかったのですが、今日一日貴方の立ち居振る舞いを見て気がついただけです」。

「さすがです。お仕えするに申し分ありません。来た甲斐がありました。感謝の言葉はわたしからお伝えしておきます。フィア様」。

そう言ってメイド長は傳いた。

そして、最後に言ったわたしに対する敬称は、常々、公爵夫人がわたしを呼ぶときに使う。母が持っていた敬称なのだ。

どうやら、わたしに対する敬称はこれで決まりと言う訳なのだろう。これ以降、訂正を求めても頑として拒まれてしまった。

この押しかけメイド達はどうやら公爵では無く公爵夫人の差し金だったのだろう。

#### 4 一人旅

早朝、わたしは書斎の窓からリリーが一人出かけるのを見送った。

出かける彼女の服装は、わたしが知っている彼女の持っている服装では無かったので、たぶんメイド長がわざわざ準備したに違いない。

リリーは少し離れたところにあるバス停でバスに乗り、先ずは、オクトーバーシティのセントラルステーションに向かう。

バスはセントラルステーションの前に停まり、リリーはバスを降りる。彼女はここには来たことが無いので、自分の内にあるデータを照らしながら目的の場所に歩いて行った。

彼女はステーションの料金表にある目的地の町までの路線を確認してから、チケットカードを使って改札を通り、南部のニューウエールズシティーに向かうリニアモノレールを時刻まで待つことになった。それで、彼女は発着を待つ待合室で時刻まで三十分ほど待つことにし、空いてる席に座った。すると彼女に気がついた年配の女性が、話しかけてきた。

「お嬢さんは、どちらまで」。

突然声を掛けられたリリーは、相手に不信感を持ったが、  
「コンウォールまでです。ニューウエールズの一つ手前です」  
と答えた。

すると、その女性は感心するように言った。

「一人で、行くのですか」。

「はい。お暇をもらったので」。

「あら、働いているの。失礼だけどいくつなの」。

その質問に、リリーの気に障ったが、それを顔に出さず、

「はい。十五になります」

と言った。

そうすると、その女性は感心するように言った。

「若いのに、もう働いているの関心ね」。

「いいえ、お世話になっておりますので、お仕えしているしだいです」。

すると婦人に興味を与えたのか、

「そう、それでどんなお仕事をしているの」

と、尋ねてきたのだった。

「はい。あるお屋敷でメイドの見習いをしております」。

そう答えたのは、出かけるときにメイド長からこの様なときの受け答えを教わっていたからだった。

「そうなの、それで、今日はどちらに」。

その言葉に、リリーはなんと言って良いのか迷うのだった。それは、彼女の記憶にあるおぼろげなデータと昨晚受け取った両親と姉妹のデータとが互いに絡み合って、彼女を突き動かすように、コンウォールに向かわせているのだったからだ。

それで、彼女が答えるのに苦慮していると、婦人は気を回してくれて、

「いけないことを聞いてしまったのかしら、ごめんなさいね」。

と察するように言ってくれた。

そこで、リリーはこう言うのだった。

「じつは、暫く離れていた両親に会うためにこれからコンウォールに向かうのです。最後に別れを言った時は、幼かったですから、わたしの両親は、わたしと分かるでしょうか」。

実際に分かれていた期間は数年だけど、自分の事は既に亡くなっているとの知らせが伝わっているのに、亡霊が現れるように会ったのなら、どんな反応をするのか分からなかった。

彼女のもらった資料にはおぼろげな記憶の中にある自分の顔がハッキリ写されていた。その顔

から、現在のリリー自身の外見年齢に相応しい顔が予測され表示されていて、今自分の顔を鏡で見たときとそれ程変わらないのは、彼女にとって嬉しかった。

そんな風に深刻に考えているリリーに対して、婦人は勇気づけることを言ってくれた。

「それは心配ないですよ。親はね愛する子供の事を考えないときは無いの、だから、喩え年齢よって外見が変わっていたとしても、必ず貴方だと分かるはずよ。親ってそういう物なの子供を愛していればいるほどね」。

その言葉を聞いてリリーは、自分が既に亡くなっているとされているのだから、両親はその事をずっと悲しんでいるのでは、との心配と既に忘れられているのではとの不安感がこみ上げていた。

そこで、リリーは夫人に言ってみた。

「励ましありがとうございます。ですが、わたしが既に亡くなっているとされていたのならどうでしょうか」。

その言葉を聞いて、夫人はリリーの目を見ていった。

「たとえ、愛する子供を亡くしたとしても、親はその子のことをちゃんと覚えているの、本当に愛しているから、そしてね、もし生きているのなら親は、愛する子供のためにどんなことでもするの、それが地の果てまで行かなければならないとしても。そうでしょう。愛しているのなら」。

この様に励ましてくれるこの年配の婦人にリリーは心から感謝した。そして、迷っていた心を固めて、両親を訪ねる決心をしたのだった。

「ありがとうございます。少し会う勇気が湧いてきました。わたしを手放したときの両親の顔とそれから一度も会ってくれなかったから、両親にとってわたしは何なんだろうと思っていたものですから」。

リリーはその様に感謝を言って席を立った。それは、インフォメーションアナウンスでニューウエールズシティ向けのモノレールが到着する事を告げていたからだった。

そこで、彼女は別れを告げてモノレールに乗り込むために歩き始める。

すると、その年配の婦人は彼女を呼び止めて言った。

「わたしも、同じモノレールなの、一緒しない」。

その言葉に、リリーは少し戸惑ったのですが、

「それでは、暫くご一緒しましょう」

と言って、立ち上がろうとする婦人の手を取った。

「ありがとう。親切に感謝するわ」。

そう答えて婦人は笑顔でリリーに導かれながらモノレールに乗り込んだ。

それから、二人は入り口の側の席を取り座った。

数分後モノレールは目的地に向かって走り出す。

この年配の婦人は、孫に会うために途中駅のハーベンに行くそうなのである。

彼女の息子夫婦はハーベンで靴職人として働いているそうで、なかなか休みが取れないために婦人が孫の顔を見に時々そこに訪れるのそうなのだ。

そんな婦人にリリーは尋ねた。

「失礼だと思いますが、どうして息子さんと一緒に住まわれないのですか」。

すると、少し考える様な素振りをしてから、  
「さてどうしてでしょう。たとえば、わたしに二人の子供がいた場合どちらかの世話を受け無ければならないでしょうか。どお」

とりりーに尋ねるのでした。

「そうですね。健康であれば、どちらにも世話にならないと言うこともありますし、長男の世話を受ける選択肢もあります」。

婦人はりりーの回答に笑いながら答えるのだった。

「そうね、その様な考え方もあるわね。でもわたしは、今は娘夫婦に面倒を見てもらっているの。それにまだ、働いているから仕事を離れるわけには、いかないでしょう。それで仕事場に近いオクトーバーシティーで娘夫婦と一緒に暮らしてるの。これは、人それぞれだから、かといって息子夫婦が嫌いだと言うことでは当然ないのよ」。

その様に話して、彼女は今は楽しいことをりりーに伝えるのだった。

その言葉を聞いて、りりーはこれから会うだろう両親に思いをはせた。

十数分後にモノレールはハーベンに到着し、りりーは年配の婦人に別れを惜しむようにしっかり抱き寄せられてから、別れを告げて婦人は降りていった。

それから暫くはコンウォールに着くまで、一人流れる車窓からの景色を見ていた。

約三十分後、モノレールはコンウォールに着いた。

りりーはモノレールを降りると出口に向かって歩き出した。

このコンウォールは町の名前では無く地区の名称である。正式にはニューウエールズシティーコンウォール地区と言う。

さて、りりーはステーションの改札を出て、地域案内板のところまで歩いて、これから行く場所の交通を確認した。

彼女は独り言のように、

「コンウォール二十一番街は、バス停から少しありそうね」

と確認したことを口にしていた。

そして自分の立っている場所から少し離れたところに、バス停があるのを確認してからそこに向かって歩き出す。

少しして、誰かが自分の後に付いてきていることに気がつく。

しかし、りりーはそれに気を止めること無く、目的のバス停に着いて、順路行き先時刻表を確認してバスを待つことにした。

そしてやはり誰か自分の後ろにくっついてしていると判り振り返る。するとそこには十二歳位の女の子が立っていた。その服装からジュニアハイであることが分かった。

「わたしに何か用なの」。

りりーはそれとなく尋ねた。

するとその女の子は、

「お姉さん。コンウォール二十一番街に行くんでしょう」

と尋ねるのだった。

「ええ、そうです」。

「だったら、わたしと同じだから、案内してあげるよ」。

「どうして、その様に言うの」。

「だって、お姉さん、さっき掲示板のところでそう言ったもん」。

「そうでした。そう此処は初めてじゃ無いけど、覚えてないので案内板で確認してたの」。

リリーは少し恥ずかしそうに答えた。

「以前住んでたの」。

少女は興味深そうに尋ねるのだった。

「よく覚えてないのだけど、ここで数年前まで暮らしてたらしいの、でも殆ど覚えが無くて、なぜだろうね」。

少女の言葉をはぐらかすようにリリーは答える。

「記憶喪失？」。

少女は首をかしげるように尋ねる。

「そうでは無いみたい。おぼろげな記憶はあるから」。

「そうなんだ」。

そう言って少女はリリーの姿をまじまじ見ながら言った。

「お姉さんって、どこかのお嬢様だったりして、ちがう？」。

「いいえ、そうではないけど。どうしてそんなこと聞くの」。

リリーは少し恥ずかしそうに否定する。

「だって、お姉さんって年齢的にはわたしより少し上って感じだから、制服着ている方が自然だよね」。

その言葉に、リリーは理解した。それで、こう言った。

「わたし、学校は行ってないの。さるお屋敷で働いているの、今日はお暇をもらって、以前住んでいたところに来てみたの。でも、だめね、殆ど思い出せない」。

すると少女は興味深そうに言った。

「そういうことも有るんだ、じゃあ通信教育なのかな」。

その言葉を聞いて、リリーはジョンと一緒にいる課題のことを思い出して答えた。

「そんな感じかな」。

「それじゃ、もう働いているんですね」。

「そうですね」。

少女の言葉にリリーは少し躊躇いがあった。それは正確な事実とは少し違うからだ。

それでも、少女はリリーの言葉に尊敬のまなざしを向けているのだった。

その様に話しているうちにバスが到着し二人して乗り込んだ。

少女の話では、彼女はジュニアハイの一年で両親と暮らしているのだそうだが、実際には姉がいたそうだが数年前に亡くなって、今は家族三人で暮らしている。

その話を聞いてリリーは、自分と重なるところがあることに気がついたが、偶然の一致と思っただけだった。

少女はリリーの仕事について聞いてきたので、自分がさる方に拾われて今まで面倒を見てもらっていたこと、同年代の主人に今メイド見習いとして仕えていることなどを話した。

「へえ、メイドさんなんだ」。

少女は興味深そうに言った。それから、こう尋ねてきた。

「今着てる服も、エプロンを掛ければメイドさんぽくなりますね」。

それに答えるようにリリーは、

「これは、メイド長に頂いた物です。ご両親に会われるのでしたら少しはオシャレをと仰って」と少し恥ずかしそうに言った。

すると少女は励ますように言った。

「お姉さん、綺麗ですよ。わたしの姉も生きていればお姉さんみたいかな」。

その言葉は、リリーには少し辛い響きがあった。彼女自身は両親と姉妹との対面を怖がっていたからだ。モノレールで乗り合わせた婦人に励まされたとはいえ、それが間近に迫ると身を切られる思いが募るのだった。

そうだとしても、自分の体は作り物で感情がこもるはずはない、と思っただけでも精巧に造形されたこの体は、血の通った人と寸分も違えない作りとなっている。けれど作り物には違いのないのだった。

「あいがとう」。

リリーそう答えると、同時にバスは目的の場所に到着し、彼女は少女に手を引かれるように降りるのだった。

バス停から降りて二ブロック先からコンウォール二十一番街となっていた。

それに向かうように、リリーは少女に手を引かれながら歩くのだった。

そのとき彼女には少しだけ朧気ながらの記憶の中から該当する建物、風景を検索しているのだった。その中にはいくつかの類似点を見いだすことは出来たが、それが何を意味する物かは分からなかった。

二人は二十一番街に入った。

そこには、記憶に該当する物が数多く存在した。けれどやはりその意味することは分からなかった。

そして、いつの間にか少女の歩みが停まっていることに気がついた。

「どうしたの」。

リリーは少女に尋ねた。

すると少女は振り返りながら言った。

「ここが、二十一番街だよ。覚えていることがある」。

その問いに、リリーは黙って肯く。

「思い出せたことはある」。

少女の問いにリリーは、

「見覚えがあるのは確かなのだけど、それが何を意味するのか分からないの」と呆然としながら答える。

すると少女は、彼女の手を引いて案内を始めた。

「このお店は覚えてる」。

「この看板は」。

「あそこの家の門は、無くなっちゃったんだけど覚えてる」。

「あの交番は前は此処にあったんだよ」。

「あの街灯いつもつきっぱなしなんだよ」。

「あの肉屋のおじさんは髪は毛無いの」。

「あそこには、大きな犬小屋があるの」。

「でも、その犬、滅多に吠えないんだよ」。

「あの電気屋さんは、何時もお昼ぐらいからお店開けるの」。

「そこの角の靴屋さん腕が良いと評判なんだ」。

「向こうの突き当たりに公園があるよ」。

矢継ぎ早に話す少女の言葉にリリーはただ呆然としていた。

そして、低い垣根を巡らした家の前にリリーを連れてきて、

「此処が、わたしの家なの」

と言って彼女をその戸口まで引いて行った。

それは、どこかで見覚えのある戸口だった。何処だろうと考えていると少女が、戸を叩いて、  
「お母さん。お客さん」

と言ったのである。

その言葉は、リリーにふと何かを思い出させるように衝撃が走る。

そのとき一瞬だがリリーは立ちくらみを覚えた。サイボーグの自分にこんな事が起きるとは信じられなかったが事実だった。

それから、ドアの向こうから声があり、少女の母親が現れた。

するとその女性は、リリーを見るなり表情がみるみるうちに変わり、泣き出しそうな表情で彼女を両腕に抱きしめるのだった。

そして、母親は言った。

「リリー、おまえ、生きていたのかい」。

「生きていたのかい」。

「よかった。よかった」。

「もうはなさない」。

「リリー、わたしの娘」。

この状況は少女にもリリーにもよく分からなかった。

そこで少女の母親が、落ち着き始めた頃にリリーは告げた。

「申し訳ありませんが、人間違いでは」。

しかし、彼女の持っているデータは母親であることを示していた。

すると、少女の母親はこう言った。

「先程、ファーナビーと言うお嬢さんから連絡がありました。貴方が帰ってくることと、なぜ今頃戻ってくるのかを話してくださいました」。

その言葉を聞いて彼女はこれはシヨンの計らいだったことを理解した。

そして、少女の母親の名はミリア・クリフトといい少女はリディア・クリフトといった。

どうやら、母親の方は大方の事情は告げられていたのだろう、彼女がサイボーグで今は、リリー・クロスポートと呼ばれていることも承知していた。

ただ、少女としては綺麗なお姉さんが出来たことで十分嬉しかったのだった。

それから、リリーは自分が話せる事を二人に話して聞かせるのだった。

暫くすると、父親も帰ってきて数年ぶりの一家四人の団らんを楽しんだのだった。この時の出

来事でリリーの断片的な記憶がつながり、ある程度の事を思い出せるようになったのだった。

## 5 プロローグ

夕闇が耕作地を染め始めた頃、シオンは書斎の片付けを止めて、お茶を飲んでいた。

「お気になるようですか」。

そばにいたメイド長が言った。

「そうでもないけど、このまま帰ってこないことも有るかなと思っただけ」。

シオンは素っ気なく答えた。

「そうでしょうか。フィア様は彼女が去って行くのを覚悟してこのことをされたと仰ってませんでしたか」。

問い詰められてシオンは言った。

「今となっては、少し寂しいかなって」。

シオンは本音を言った。

「少しやせ我慢がすぎますよ」。

「そうかもしれませぬ」。

そう言ってカップを戻すシオンを見てメイド長は、ずいぶんしおらしいことと思った。

そうして、ふと外を見ると、夕闇に包まれながらもバス停の方から誰か歩いてくるのが確認できた。

シオンはまさかと思いながらも螺旋階段を駆け下りるのだった。

上の方からは、メイド長の「お静かに」との声が響いていた。

そして、シオンは玄関の扉を開けた。すると帰ってきたリリーが農機具の片付けをしている使用人達に挨拶しながら近づいてくるのだった。

そして、リリーはシオンを見るなり、

「ただいまです。お嬢様」

と言ったのです

「おかえり、リリー」。

彼女は帰ってきたのだった。今回の事でリリーは主人の気遣いに感謝を述べてから、すでに彼女自身が別の暮らしを始めていることを両親と妹に認めてもらい帰ってきたと言ったのだった。

けれど、これによって月に一度暇をもらって実家に帰る許可を求めたのだった。そして彼女は言った。

「わたしに帰る場所と慰めをありがとうございます。フィア様」。



オクトーバーレイン ～神在月雨～

<http://p.booklog.jp/book/69097>

著者：にしのまさみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aqualeef/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69097>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69097>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ